

## 自己を開く，社会を拓く

社会科教育・森 貴子

### 1. 授業の概要

ここでは、2010年度「後期」開講の福祉デザインフォーラムについて、授業評価を行うつもりである。その前提として、コースのカリキュラム全体のなかでの本授業の位置づけ、および過去の授業との関連性について、説明しておく。

#### (1) デザインフォーラムの位置づけ

デザイン「フォーラム」（＝対話の場）は、人間社会デザインコースの中核をなす。既存の学問分野の枠を超えて、総合的な視点から現代社会の諸問題にアプローチするため、多数の教員がコミットし、中長期的なスケジュールで運営されている。具体的には、三領域（＝地域デザインフォーラム／平和デザインフォーラム／福祉デザインフォーラム＝本授業）で編成された演習形式の授業であり、それぞれに所属する教員たちが工夫をこらして進めている。学生は、一回生後期から三回生後期までの五期にわたって、これら三つのフォーラムを自由に選択・行き来し、自らの経験・知見を深めていくことが期待されている（一回生から三回生まで合同で行う、選択必修科目としての位置づけ）。2008年創設の本コースでは、最上回生である三回生がこの後期で最終タームを終了したことにより、一連のフォーラム自体が一つの区切りを迎えたことになる。

#### (2) 福祉デザインフォーラムの概要

福祉デザインフォーラムは、一人一人が「よりよく生きる=well-being」社会の模索を目的に、文献講読とフィールドワークを組み合わせて実施している。担当教員は、発足当初からのメンバーである鴛原進、壽卓三、森貴子に加えて、今期から新たに参加した、新任の魁生由美子教員である。学生については、長期的には受講者にある程度の変動はあるものの、特に二・三回生に関しては、前期からの、あるいはそれ以前からの継続性がかなり認められる。また、本フォーラムの特質として、

皆で一つのテーマを追求するよりも、学生が各人の関心に基づいて勉強（理論研究と調査）を進め、演習の場で成果を共有し、討議によって質を高めてくという点が指摘できる。今年度前期に行った京都研修では、前任の中西典子教員の協力も得て、個々のテーマでの進展が見られた。この成果が、コムズの人材育成講座への参加という、今期フォーラムの主要な活動に結びつくのである。

#### (3) 2010年度後期授業の詳細

金曜日1時限目に開講された後期福祉デザインフォーラムは、「自己を開く、社会を拓く」をキーワードに進められた。それぞれに固有な問題を抱えているため、自閉し孤立しがちなわれわれが、どのようにして自らを開き、他者と協働して「よりよく生きる」社会を切り拓くことができるのか。この問題に取り組むため、他者との、あるいは理論と実践との、「繋がり」がサブ・テーマとなった。具体的には、

##### ①文献講読

シリーズ『自由への問い』（岩波書店）全八巻のうち、二・三回生が論文を選択・報告し、それに基づいて全員で討論を行った。報告者に対しては、できるだけ踏み込んだ読み方（自らの関心・経験に基づいた整理）と問題提起（討論テーマの提示）を行うよう、指導した。討論では、受講生全員が必ず一度は発言することを前提とした。

##### ②連続講座の企画・運営

コムズ（松山市男女共同参画推進センター）からの依頼を受け、学生主導による5回連続の講座を企画・実施した。継続的に本フォーラムに参加している二・三回生が中心となって、それぞれの研究テーマを軸に内容を設定し、ゲストとの打ち合わせなどの準備から、当日の司会・進行までを行った。これが『コムズ白熱教室 多様性のある社会をデザインするー一人ひとりが充実した生を送りたいー』である。講座個々のタイトルおよびスケジュールは、

- ・ 11月10日『ワガママなワタシ?』
- ・ 11月24日『若者って怠け者?ー働き過ぎと貧困ー』
- ・ 12月1日『あなたの普通って何?ボーダーラインを見つめる』
- ・ 12月8日『障害ってどういうこと?ー共生社会を目指してー』
- ・ 12月15日『認める+繋がる+自分らしさ = 「エイブルアート」

(いずれも水曜日の午後 18 時 30 分から 20 時 30 分まで。毎回二十人程度の学生・社会人の参加があった)

講座を担当しない他の学生に対しては、講座への参加はもちろんのこと、企画段階から全面的に協力するよう促した。また、一回生については、コムズへのフィールドワークという意味も込めて、それぞれの担当学生に配属して活動させ、後日の演習で体験記を報告させた。

③フォーラム合同報告会：2月21日(月曜日)の13時から、地域デザインフォーラム、平和デザインフォーラムと合同で、それぞれの研究結果を報告・討議する時間を設けた。本フォーラムは、コムズでの活動を中心として演習の全体像を紹介するとともに、学生・教員全員で議論したい論点として、「大学で学んで、どういうこと?」を提示した。

以上のように、今期の福祉デザインフォーラムは、授業時間外の活動も本格的・継続的に取り込んで実施された。正式の授業時間である金曜日一時限は、文献講読を柱としながらも、コムズの事前・事後報告も含めて、互いの研究・活動内容を共有・深化させるために充てられた。

## 2. アンケートの内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした。受講登録者17人中、アンケート回答者は17名(一回生6名/二回生6名/三回生5名。全て人間社会デザインコースに所属)であった。

◎ 問1~4は、次の五段階で評価してもらい、次表のような結果を得た。

<評価基準>

- 5 : 強くそう思う (非常に良い)
- 4 : ややそう思う (良い)

- 3 : どちらとも言えない (普通)
- 2 : あまりそう思わない (あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない (良くない)

<問い>

- 問1 この授業への出席状況は
- 問2 授業のテーマ・目的は、明確でしたか
- 問3 授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか
- 問4 授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	6 (35%)	6 (35%)	3 (18%)	1 (6%)	1 (6%)
問2	2 (12%)	10 (59%)	2 (12%)	3 (18%)	0
問3	1 (6%)	7 (41%)	5 (29%)	4 (24%)	0
問4	13 (76%)	3 (18%)	1 (6%)	0	0

\* 問1~4に対するコメント

- 問2 : 全体のテーマを意識しつつ授業に取り組むことが少なかった(一回生) / 方向性は理解していた(三回生) / だんだん分かってきたような気がする(三回生)
- 問3 : まだまだ勉強が必要(一回生) / 自分の姿勢にもムラがあった(三回生)
- 問4 : いろいろな人の考え方を知り、感化された(一回生) / 得るところはあったが、それが実生活に活かさきれていない(三回生) / この授業だけでというわけではないけれど、自分がこれから何をしたいか、考えることができた(三回生)

◎ 問5~7は記述式で解答を求めた。以下、紙幅の制約上、内容を整理して取り上げる。

問5 この講義をコムズの講座と連動させたことについてどう思いますか?

普段接する機会のない人達と関わってよかった(一回生・二回生・三回生) / 文献の内容は難しかったけれど、討論とコムズでの内容とは関連づけることができた(一回生) / 学びと社会をつなげることができて、よい機会だった(二回生・三回生) / コムズでの企画にこだわりすぎたように思う(二回生) / 目的を持って計画的にできたのでよかった

(三回生)

問6 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

全員が発言できる場所(一回生・二回生・三回生) / これまでよりも生活のなかで「考える」時間が増えた(一回生) / コムズでは先輩方に感動したが、来年もやるのならば不安(一回生) / 皆が同じ文献を読み、それぞれの考え方を比較できたことで、自分自身が豊かになれた(一回生・二回生) / 壽先生の話(一回生) / 今まで遠く感じていた問いが近いことに気づけた(二回生) / 社会人、外部の人たちと話せたこと(二回生・三回生) / 学生の発言時間が以前より多くなった(三回生) / 自由度が高い。意識の高さや準備の量に差があった(三回生)

問7 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

文献講読後の討論テーマがその日に示されたので、自分の考えがまとまらない(一回生) / 温度差を感じた(一回生) / 反対意見を言いつらい(一回生) / 様々な人と関わりあえる場をもっと増やすと良い(一回生) / 教員以外からも、意見に対する意見が欲しかった(二回生) / もっと文献からの学びを大切にしたい(二回生) / もっと先生方の話が聞きたい(二回生) / 全員が表現しやすい雰囲気をつくる(三回生) / 学生たちの間で、事前準備などの意識が低い。授業時間自体ももう少し増やしてほしい(三回生) / 何人かで一つの授業をするなど、全員が授業時間に関わる形をとればよいと思う(三回生)

### 3. コメント-授業の達成度と課題-

アンケート中の問4への回答結果、および問6でのコメントなどから、人と人との、そして自分と社会との「繋がり」を考えると、今期フォーラムの目的は、ある程度達成できたように思う。コムズとの連携企画もおおむね好意的に評価されているようだ。ただし、多くの課題が残されていることも否めない。以下では授業での学生の発言も念頭に置きつつ、より本質的と思われる二つの課題を提示してみる。

#### (1)理論と実践との繋がり

本フォーラムの学生たちがよく口にしていた言葉がある。それは、「大学での学びと実生活が繋がらない」ということだった。書物に書いてあること、あるいは教員が講義で話す内容は「お勉強」であって、自分の問題とは切り離されている、というのである。この点では、問題を自ら提起し、ゲストを含め多様な人々と語り合ったコムズでの経験が、理論と現実との橋渡しの役割として有効であった(アンケートの「問5」および「問6」を参照)。ただし、「もっと文献からの学びを大切にしたい」、「コムズでの企画にこだわりすぎたように思う」「もっと話をしたいし、聞きたい」などのコメントからは、フォーラムが活動的であった反面、落ち着いて思考を巡らす時間を十分に共有できなかったという、弊害も浮び上がってくる。ディスカッションの場面での問題点も多々指摘されており(「問7」に対するコメント)、もう少しじっくりと時間をかけて話し合い、考えを深めていく場を設ける必要がある。

#### (2)他のフォーラムとの繋がり

これも学生たちからよく指摘されたことだが、他の二つのフォーラムとの交流が足りず、閉鎖的だという問題もある(「問7」に対する最後のコメントもこれに関連したものか)。このことは、学生のフォーラム選択にも影響しているようだ。前述のように、本コースの学生は三つのデザインフォーラムを自由に行き来し、勉強を重ねることが期待されている。しかし実際には所属学生は固定される傾向にあり、その要因として、各フォーラムの個性と独自の活動が裏目に出ていることが考えられる。というのも、われわれ教員の側が、自らの運営するフォーラムを良いものにしようとするほど、他のフォーラムとの連携を欠く方向に傾いてしまったり、学期最後に合同報告会を持つくらいでは、この問題の解決には繋がらないようなのだ(「活動内容はよく分からないし、他のフォーラムは他のフォーラムで楽しそうにやっているし、今さら移動しにくい」)。これまでの三年間、われわれ教員は特定のフォーラムに所属したままで、試行錯誤しながら創設期を乗り越えてきた。しかし今後は、教員の流動性も意識しつつ、フォーラム全体の繋がりを強く押し出していくべきであろう。

#### 4. 総合人間形成課程 DP と関連した評価

さて、今回は、総合人間形成課程のディプロマ・ポリシー（卒業認定方針）と関連したアンケートも実施した。以下ではその結果を提示するとともに、授業担当者の感想を簡潔に記しておく。

##### (1) アンケート内容とその結果

アンケートの内容および結果は以下の通り。  
＜問＞卒業時の到達目標である教育学部 DP のそれぞれについて、この授業の受講前と比較して向上しましたか。4 段階で自己評価して下さい。（1：向上していない，2：どちらかと言えば向上していない，3：どちらかと言えば向上した，4：向上した）

＜DP1.＞充実した生涯学習社会を築くため、生涯学習に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を習得している。（知識・理解）

＜DP2.＞現代社会で生じているさまざまな課題について論じ、適切な対応を考えることができる。（思考・判断）

＜DP3.＞生涯にわたる学習を支える教育活動に取り組むため、高い技能と豊かな表現力を身につけている。（技能・表現）

＜DP4.＞生涯学習に関する自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。（関心・意欲）

＜DP5.＞社会人としての使命感や責任感と多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。（態度）

評価	1	2	3	4
DP 1	0	4 (24%)	10 (59%)	3 (18%)
DP 2	0	2 (12%)	11 (65%)	4 (24%)
DP 3	1 (6%)	8 (47%)	7 (41%)	1 (6%)
DP 4	2 (12%)	5 (29%)	6 (35%)	4 (24%)
DP 5	0	3 (18%)	12 (71%)	2 (12%)

##### (2) 感想

DP 1、2、5 に関しては、「どちらかと言え

ば向上した」、「向上した」がかなりの割合を占めている。これは、本フォーラムでの文献講読が DP 1（知識・理解）、コムズでの活動が DP 2（思考・判断）および DP 5（態度）と関連づけて評価された結果と思われる。逆に低い評価にとどまった DP 3（技能・表現）および DP 4（関心・意欲）については、どのような取り組みが有効か、今後考えていかなくはなるまい。ただし、DP は「卒業認定方針」であり、あくまで卒業までの四年間で到達すべき目標であるはずだ。したがって DP との関連での評価をより実質的なものとするためには、おおよそ各回生に応じた、段階的で具体的な目標＝評価項目を改めて設定して行う必要があるのではないか。